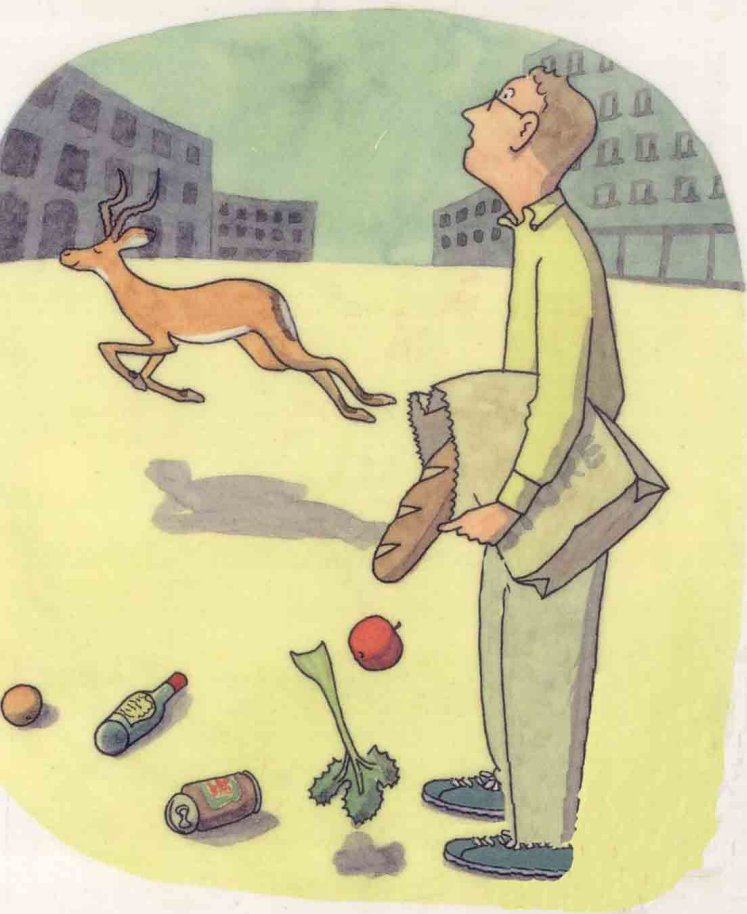


インパラは転ばない

池澤夏樹



新潮文庫

インパラは^こ転ばない

新潮文庫

い-41-3



平成七年六月一日発行

著者 池^い澤^ざ夏^な樹^き

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

編集部(〇三)三二六六一五四〇

電話 読者係(〇三)三二六六一五一

振替 〇〇一四〇一五八〇八

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛てご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社三秀舎 製本・有限会社加藤新栄社
© Natsuki Ikezawa 1990 Printed in Japan

ISBN4-10-131813-1 C0195

新 潮 文 庫

インパラは転ばない

池 澤 夏 樹 著



目

次

I

うしろの正面	一三
曲り角で待つている	一六
遠いホテルへの道	二〇
サイクリストの憂鬱	二五
船に酔わない体質	二九
インパラは転ばない	三四
サハラ沙漠の汽車ぼっぼ	三八
路上に怪異のあらはれること	四三
犬の散歩と男の散歩	四六
イスラエルの巨大なパフェ	五一
幼い二人の夢幻の旅路	五五

メスアカムラサキの策略……………	五九
コロンボ空港のペテン師……………	六三
商売往来、あるいは往来の商売……………	六七
スーパ―・マラソン・バード……………	七一
アームチェア・パイロット……………	七六
コペンハーゲンの三時間……………	八〇
路上観察の三つの成果……………	八四
アジア大陸への渡り方……………	八八
ホモ・ツーキンスの観察……………	九三
きみは何を踏んで歩きたい？……………	九七
「通い小町」についてのおそろべき真相……………	一〇三
セミ・ヌードでひとまわり……………	一〇六

迷うなら山羊の道	一二〇
家を出てまっすぐ北へ	一二四

II

尾根には誰もいなかった	一二二
南洋芳香群島	一二四
一度行ったところだが	一二七
ストックホルムを歩く	一三〇
世界最小の焼肉定食	一三三
買出し部隊	一三七
甲板の上の優雅な退屈	一四〇
斜めに行く	一四四
夕焼けフライト	一五四

タラップを降りる		一五
田舎の空港		一六
憧れのスチュワーデス		一七
週に一便		一七
犬の友だちと拝ん所		一七
好きな道 ニンフェウー街		一八
亜熱帯への恋情		一八
一番好きな朝食		一八
ヤシ酒飲み		一八
旅びとの資質		松村 栄子

インパ
ラは転
ばない

I

うしろの正面

季節が冬から春に移る分かれ目の日がある。その日を過ぎると、空がすっかり明るくなる。空気に含まれる暖かきの量がぐんと増え、風の匂においははっきり変わるので、誰でも春が来たことに気付く（夏の最初の日というのは、それほど明確にはわからないものだ）。

そういう日には、家の中にいるのもったいない気がして、みんなが陽光の中へ出てくる。正にその日、午前中はそれでも仕事をしていたのだが、さすがに午後になると机に向かつているのがいやになって車を出した。それがたまたま日曜日で、しかも短い連休の一日目だということをすっかり忘れていた。

気がついた時には、都心に向かう渋滞に巻き込まれていた。東京に住んでいると、道が込むことには慣れるほかなくて、週日ならば車はまず使わないし、休みの日でもなるべく早朝のうちに動くようにしているのだが、この時はたぶん頭の中にも春が到来して霞かすみがかかつて

いたのだ。

道は込んでいる。のろのろと十メートルほど動いてはブレーキを踏む。うしろの車が勢いよく近づいてくる姿が、バックミラーに映った。ぶつけてくれるなよ、と思いながらミラーを注視していると、車間一メートルのところでぴたりと停とまった。やれやれ。

普通はうしろの車に乗っている人の顔など見ようとはしないし、實際の話、車間があいていれば性別さえわからないのだが、渋滞の時には相手は後方数メートルのところにいる。見る気がなくても、見えてしまう。空から降ってくる光がフロント・ガラスで反射しているから、顔がはつきりと見えたわけではないけれども、二十歳をいくつかすぎた年ごろということとはわかった。

車は大きな白いクラウンだから、本人のではあるまい。お父さんのを借りてきたのかもしれない。それに一人で乗っている。信号が変わるたびに車の列は少し進んで、また停まる。その都度、彼女は遠くなり、また近づく。ちょうどいい距離まで来て、停まる。目鼻だちがくつきりしたい顔だ。昔、ヘミングウェイがパリのサン・ジェルマン広場のキャフェで見たけた若い女を形容した言葉を借りれば、「とてもきれいで、鑄造したての銀貨のように新鮮な顔」というところ。

彼女は渋滞にじれていた。見えもしないのに、身を乗り出して列の前の方を見る。それか

ら、ハンドルを親指でパタパタたく。髪の毛に触る。もじもじと、トイレを我慢している子供のよう^にに落ち着かない。そういうことが全部見える。一つも言葉を交わしていないのに、性格がわかる。きれいで、驕慢^{きょうまん}というほどではないけれども少しわがまま。幼稚なようだが、しっかりした面もある。

それを見ている。二、三十分の間ずっと彼女はうしろの正面にいた。そんな風に見られているとは気付いていないだろう。視線の方向が一方的だから、まるでこっそり覗^{のぞ}いているようだ。無防備の姿を見ているという軽いうしろめたさ。それでも、目をそむけはしない。信号が黄色になった時に交差点を突っ切ってしまうと、間に他の車が入りこんで彼女の顔は見えなくなる。だから、先を急がず、早めにブレーキを踏む。

話はそれだけなのだ。それ以上は何も起こらない。起こりようがない。そのまま進んで渋滞のもつとも激しい地域に車を乗り入れる気にはなれなかったのだ、ほくは途中で右折して裏道にそれた。彼女はその脇^{わき}をすつと通っていった。横顔を見る暇はなかった。たぶん、横からでも前から見たとおりにきれいなのだろうと思った。

都会では時々こういうことが起こる。都会は人と人を思わせぶりに少しだけ近づけて、あとは知らん顔をする。

都会の春はこんな具合にやってくる。